

『おくのほそ道』における「美人」論

松 本 実 可

はじめに

俳人松尾芭蕉の『おくのほそ道』では、元禄二（一六八九）年の陰暦三月二十七日から八月二十一日にかけて行った、奥州行脚の旅が描かれている。その文章表現は独特なものであることは、既にくの先行研究によって言及されている。古人の漢文・漢詩表現を踏襲し、そこに芭蕉の思想や言語感覚が加わることで、他の紀行文とは一線を画す文章表現となっているのだ。なかでも、特徴的な文章表現が見られる章段は、「松島」と「象潟」であろう。

「松島」では、本文中に「造化の天工」とあるように、芭蕉は自然の中に造化主の存在を認めると共に、「東南を入りて」と松島を主体に置き、俯瞰的な視線で風景を描写している。そして「象潟」では、蘇東坡や葉苔磯に詠まれた景観を、眼前の景色に重ねる点に芭蕉の漂泊観を読み取れる。造化と一体になりながら、象潟の美しさを描き出しているのである。こうした記述から、芭蕉の文章表現の根底には、造化随順思想と漂泊観といった二つの思想のあることが確認できよう。そして、「松島」における「美人」という言葉の用法は、芭蕉の言語感覚を考える上で、注目すべき文章表現だと考

えられる。芭蕉は「美人」という言葉を平面的に使うのではなく、奥行きを持たせたものとして昇華させたと推察されるのだ。当論文では、『おくのほそ道』の「松島」と「象潟」を中心に考察することとで、この「美人」という用法について詳しく検討し、解釈したい。⁽¹⁾

一 先行研究

抑々ことふりにたれど、松嶋は扶桑第一の好風にして、凡洞庭西湖を恥ず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江潮をたふ。嶋ぐの数を尽して、歎ものは天を指、ふすものは波に圃。あるは二重にかさなり、三重に畳みて、左にわかれ、右につらなる。負るあり、抱るあり、児孫愛すがごとし。其景色杳然として、美人の顔を粧ふ。ちはや振神のむかし、大山ずみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞を尽さむ。
〔松島〕、傍線筆者、以下同

松島の美しい情景を賛美しつつ、眼前の風景を細かに表現しており、松島を上空から見下ろしているような印象を与える。そこに傍線部の「美人」という言葉が使われるのである。

「美人」の解釈についての主な先行研究を見てみる。

(ア) 尾形仍氏『おくのほそ道評釈』（角川書店 二〇〇二年）

蘇東坡の「西湖」〔聯珠詩格 二〕に「水光激瀾晴偏好 山色朦朧雨亦奇 若把西湖比西子 淡粧濃抹兩相宜」とあるのを踏まえ、松島の風景の美を、美人西施が美しく化粧をした顔にたとえたもの。

(イ) 久富哲雄氏『おくのほそ道 全訳注』（講談社 一九八〇年）

先に、松島を西湖に比したのは、蘇東坡「西湖」の詩句が機縁になっていることを述べたが、その詩中に「若把西湖比西子 淡粧濃抹兩相宜」（正保三年〈一六四六〉板「聯珠詩格」）と、西湖を美人西施にたとえているところがあるので、松島を叙するのに「美人」を持ち出したもの。

(ウ) 堀切実氏編『おくのほそ道 解釈辞典』（東京堂 二〇〇三年）

蘇東坡「西湖」〔聯珠詩格 二〕をふまえ、松島の美しさを、越王句踐が呉王夫差に送った美妃西施の美しく化粧した化粧になぞらえるのが、これまでの一般的な解釈である。

すなわち、本稿の論点である「美人」とは、単に美しい女性を指すのではなく、中国の美女・西施だとする解説書が多い。なお西施とは、中国の春秋時代（紀元前七七〇年―四七三年）に、越王・句踐が呉王・夫差に贈った美しい女性である。呉王は、西施の美貌に溺れて政治を疎かにし、国を沈めてしまう。一国を傾けるほどの西施

の美しさは、漢の王昭君、後漢の貂蟬、そして唐の楊貴妃と共に中国四大美人として称されている。また、西施は胸に病を患っていたと伝えられており、胸を押さえて苦しむ姿もが、弱く美しかったという。

「美人」が西施を指すことは、先に挙げた先行論文以外でも、多くの研究者に言及されているが、ここで留意したい点は、「松島」本文中には、西施の名前自体は登場していないということだ。

一方、他の章段では西施の名が登場する箇所がある。「象潟」の発句「象潟や雨に西施がねぶの花」だ。この句は、雨にけぶる象潟の景観に、病に伏せる西施の姿を重ねたものであるが、この点は後述したい。

以上、「美人」は中国の美女・西施だとする先行研究が多いことを述べたが、「松島」と「象潟」両方において、景観の美を表現するのに西施が用いられていることに対して、松本寧至氏は異を唱えている。松本寧至氏は、「笑ふが如く」と比喩される、いわば「陽」のイメージを持つ松島と、「うらむがごとし」と描写される「陰」の象潟とが、同じ西施という女性を指すことは、不自然であるという以下の指摘をしている。²⁾

「松島」の描写のうち「美人の顔を粧ふ」について、諸注はすべて蘇東坡の「西湖」の詩を引いて、西湖は西子、すなわち西施に比しているのは、どうかと思う。「象潟」で西湖をおもい、西施に比したのはそれでよいが、洞庭・西湖に恥じないという松島を西湖あるいは西施に限定するのはおかしい。西施は「象潟」に限定されねばなるまい。「寂しさに悲しみ」を加えた美

人が西施ならば、「笑ふが如く」は洞庭湖にあたり、「笑ふが如く」美人は西施ではなからう。(中略) 松島の景観を嘆賞するなかにも西施を持ち込み、象潟においても西湖が西施であるとすると、「笑ふ」も「恨む」も同じことになる。(中略)「うらむがごとし」が西施なら、「笑ふが如く」は楊貴妃をさすだろうというのが、私のはじめからの推測であった。

松本寧至氏によれば、象潟を西施に例えるのは妥当であるが、松島の「美人」は楊貴妃のイメージを借りているという。そして、西湖は病に伏せる「陰」の気を持つ美女・西施、洞庭湖は明るく闊達な美女・楊貴妃を指すと述べている。また、楊貴妃の容姿が健康的でふくよかであったこと、唐代の女性は乗馬をしたり狩猟をしたりといった活発な面があることから、楊貴妃の最期は悲惨なものだったにせよ、明るいイメージがあるとしている。

傍線部においては、「象潟」で西施を西湖に例えているとすると、松島での西施像と象潟での西施像とで差異が見られなくなるといふ。そして、「象潟」の「松島は笑ふが如く、象潟はうらむがごとし」という一文において、「笑ふ」と「恨む」とに言葉を分けた意味がないと述べており、「(楊貴妃に似た) 笑ふが如く、(西施に似た) 象潟は、うらむがごとし」とするのが適切であるとしている。

さて、松本寧至氏の論を説明してきたが、氏の論をまとめると、

● 西湖＝西施＝憂いを帯びた美女＝象潟

● 洞庭湖＝楊貴妃＝明るく闊達な美女＝松島

ということになる。前掲『おくのほそ道 解釈辞典』では「西施の美しく化粧した化粧になぞらえるのが、これまでの一般的な解釈で

ある」とされるが、それとは異なる解釈が可能ではないかと考えられるのだ。

二 発句「象潟や」から見る西施像

先行論文を整理し、「松島」における「美人」の解釈については、西施を指すのではなく、楊貴妃を指すという解釈が可能であることを確認した。第二章では、芭蕉が抱いていた西施像を改めて検討する。

『おくのほそ道』中で西施の名が明記される箇所は、「象潟」の「象潟や雨に西施がねぶの花」である。この句は、尾形仇氏が『おくのほそ道評釈』で指摘するように、蘇東坡作「西湖」(「聯珠詩格」) による影響が強い。本邦における『聯珠詩格』については、長沢矩也氏『和刻本漢籍分類目録』に、寛永九年の村上平楽寺版以下数種が報告されているが、住吉朋彦氏によれば、寛永二〇年以前の版で、正保三年吉野屋権兵衛の修印本系が最も普及したとされている。本来、吉野屋版の増注を伴う本文を掲載するべきであるが、論の構成上、増注を除いた大窪詩仏らが刊行した文化元年版本文を、便宜上挙げてみれば、

水光激瀧晴偏好 此是濃抹

山色朦朧雨亦奇 此是淡粧

若把西湖比西子 以西子比西湖工巧

淡粧濃抹兩相宜

とある。柏木如亭は『詠注聯珠詩格』に、

水的光激瀧と晴は偏好 山の色朦朧と雨も亦奇

この西湖をば西子といった美人に比て若把ば

ふりの淡粧でんきの濃抹両相宜^{うすけしやうべにおおづりやうはうながうつつし}

として「美人」という語を加えて書き下している。⁽⁵⁾「西湖」では、西湖と西施の美しさは比肩していると詠われている点が「工巧みなり」と称されているのだ。蘇東坡が「西湖」を詠んだ時期は、中央から地方へ左遷された頃であつたそうだが、左遷に対する悲嘆の思ひは感じられない。

なお、象潟章段においては、「象潟や」の句以外にも、「雨朦朧として」「闇中に莫作して」など、「西湖」に関連した表現も見られる。芭蕉の西施像は、「西湖」によるものが大きいだろう。しかしながら、蘇東坡の「西湖」では、西施の容貌描写は少なく、「淡粧濃抹両相宜」とあるのみである。「濃抹」は「水光激灑として晴て偏に好し」についての、「淡粧」は「山色朦朧として雨亦た奇なり」についての表現であるが、芭蕉自身が象潟を濃化粧の西施に例えているのか、薄い化粧の西施に例えているかの明確な記述はない。以上を踏まえ、西施の解釈に触れた先行論文を見る。

尾形佚氏は『おくのほそ道評釈』において、

西施の面影に照応するものを瞩目のねぶの花の上にとらえ、そこに象潟という歌枕の女性的な暗鬱の美の象徴を見いだしているところに、詩人的直観の鋭さがある。として、日本海に面した「陰」の美を持つ象潟を、西施の面影がある合歓の花に例えていると述べている。

対して、黄佳慧氏は「象潟や雨に西施がねぶの花」における西施像(『連歌俳諧研究』一二二号 二〇一二年三月)において、

発句「象潟や」における、「雨」と「ねぶの花」によって生じた西施像は、「淡粧で昼に眠っている」西施の姿として解釈し

たい。

として、芭蕉が「ねぶの花」から眠る西施を連想した可能性を示唆している。また、芭蕉が参照していたとされる『聯珠詩格』の注釈を分析し、蘇東坡の詩における西湖は淡化粧をした西施のようだと指摘している。すなわち、尾形佚氏は西施を「憂える美女・濃抹」として捉え、黄佳慧氏は「眠る美女・淡粧」と捉えているのである。それでは、両氏の論を参考に、改めて西施像について解釈したい。まずは、西施を憂える美女とするか、眠る美女とするかについてである。象潟を「寂しさに悲しびをくはえて、魂をなやますに似たり」と捉え、「陰」の美を持つとしていた芭蕉が、一方で「眠りを貪る西施」と例えるであろうか。西施が病床に伏せていたことにより、芭蕉が眠る西施を連想した可能性も否定できないが、眠る行為からは、「寂しさに」とあるような、憂いの情を感じることは難しい。よって、ここでの西施は憂える美女とするのが適切だろう。

続いて、「濃抹」か「淡粧」かについてである。芭蕉は、「雨朦朧として鳥海の山かくる」と描写しており、雨で朧けになる象潟の様子を西施になぞらえたのだと考えた。尾形佚氏が、「芭蕉は雨にぬれて葉を閉じ、ひとしお寂しい美しさのまざるその花に、西施の憂いに眼を閉ざした面影を感じ取ったのである」と述べているように、芭蕉は象潟に憂いの美を感じ、西施にそれを当てはめた。そして、西施と象潟とが併せ持つ憂いの美を、ねぶの花に重ねたのである。女性が鈿を挿している姿に似た、ねぶの花が雨に濡れた様子は、まさに西施が憂える姿であったと言える。そして、「雨朦朧として鳥海の山かくる」とあるように、雨に朧気になる様子は、西施の淡化粧を連想したのだと考えられる。

以上述べたことから、芭蕉の抱いていた西施像は「憂える美女・淡粧」であると考える。

三 楊貴妃の受容

次いで、楊貴妃の受容の観点から、「美人」について検討する。松本寧至氏は、先掲論文で、松島は「陽」の楊貴妃、象潟は「陰」の西施に例えられていると述べている。しかし、はたして氏の言うように、江戸期において、楊貴妃は「陽」のイメージで捉えられていたのだろうか。そこで、「長恨歌」や謡曲『楊貴妃』を引用しつつ楊貴妃の受容を考え、芭蕉の指す「美人」とは誰であるか論じた。また、御伽草子や仮名草子における美人の用例を抜き出し、芭蕉の文章表現の独自性についても考察する。

まずは、白居易「長恨歌」から、楊貴妃に関する描写、楊貴妃の台詞を抜き出してみる。

- 5 天生麗質難自棄
- 7 回眸一笑百媚生
- 8 六宮粉黛無顏色
- 13 雲鬢花顏金步搖
- 21 金屋粧成嬌侍夜
- 87 中有一人名玉妃
- 88 雪膚花貌參差是
- 95 雲鬢半偏新睡覺
- 96 花冠不整下堂來
- 99 玉容寂寞淚闌干

100 梨花一枝春帶雨

（青木正児氏編『漢詩大系 卷十二』集英社 一九六四年、番号は同書に拠る）

絶世の美女としての楊貴妃の美しさが、雪や花などの花鳥風月に例えられて表現されている。『梅妃伝』では、楊貴妃の嫉妬深さを伝える説話も収録されているが、「長恨歌」に描かれている楊貴妃は、嫉妬深いと言うよりは、玄宗を愛し続ける健気な女性像が読み取られる。玄宗と離ればなれになりながらも、育まれた愛情を信じ、死後の世界で玄宗と再会することを願う楊貴妃は、いじらしい女性であると言えよう。

次に、謡曲『楊貴妃』を見てみる。

シテ「昔は驪山の春の園に。ともに眺めし花の色。移れば變る習ひとて。今は蓬萊の秋の洞に。ひとり眺むる月影も。濡るる顔なる袂かな。あら戀ひしの古やな

ワキ「唐の天子の勅の使。方士これまで参りたり。玉妃は内にましますか

シテ「なに唐帝の使とは。何しにここに來たれるぞと。九華の帳をおし除けて。玉の簾をかがげつつ

ワキ「立ち出で給ふ御姿

シテ「雲の鬢づら

ワキ「花の顔はせ

シテ・ワキ「寂寞たる御眼の内に。涙を浮かめさせ給へば

地上歌「梨花一枝。雨を帯びたる粧ひの。雨の帯びたる粧ひの。

太液の。芙蓉の紅未央の柳の緑もこれにはいかで優るべき。げにや六宮の粉黛の顔色のなきも、理や顔色のなきも理や

〔中略〕

シテ「げにげに汝が申す如く。今はかひなき身の露の。あるにもあらぬ魂のありかを。これまで尋ね給ふ事。御情には似たれども。」「訪ふにつらさのまさり草。かれがれなければなかなかの。便りの風は恨めしや。又今更の戀慕の涙。舊里を思ふ魂を消す

〔佐成謙太郎氏『謡曲大観第五卷』明治書院 一九三九年〕

金春禪竹作「楊貴妃」の本文は、「雲の鬢づら」、「花の顔はせ」など「長恨歌」から多く取り込んでいる。「長恨歌」と異なる点と言えば、「長恨歌」は、楊貴妃の生前から物語が語られているのに対し、「楊貴妃」冒頭では既に楊貴妃は死去しており、方士が玄宗の命を受け、蓬萊国に参じるところから始まる点である。楊貴妃の性格については、「楊貴妃」と「長恨歌」で大きく変わることはなく、玄宗と強い愛で結ばれた女性として描かれている。⁽⁶⁾ 続いて、仮名草子や御伽草子の記述から、当時の美人の用例を見る。

折節、嵐激しく吹きて、御簾をさつと吹き上げた隙より、姫君と中将殿の御目を見あはせ給ひける。かの姫君の御有様、漢の李夫人、楊貴妃もこれには過ぎじと見え給ふ。〔文正草子〕

横笛櫻がさねの薄衣に、紅の袴のそばをとり、身を押しのけて出（で）たるかたち、嬋娟として楊貴妃、李夫人も、是にはい

かで増るべきとぞ覺えける。〔横笛草子〕

李夫人楊貴妃、衣通姫、小野小町と聞傳へしも、是にはいかがまさるべき、われさへ見れば、あまりの美しさに、たちどもさうにおぼえず〔さいきい〕

ものによくよく譬ふなれば、楊貴妃、李夫人、衣通姫に、女三宮の立ち姿、臘月夜の尚侍、弘徽殿の細殿もこれにはいかでまさるべき。〔浄瑠璃十二段草紙〕

その内にかの君、いかにもほしやりとさせられ、引きつくりはぬ風情にて、丈にあまれる御髪を打ち乱し給ひける。露殿おほしめし給ふやう、「いつくしの有様や。昔の楊貴妃・李夫人も、これにはやはかまさらん」と、見とれてこそおはしけれ。〔露殿物語〕

以上五作品の全てに共通して、楊貴妃と李夫人が用いられている。このことから、当時の人々は、「美人」と言えば、楊貴妃と李夫人とを想起したと言えよう。李夫人は、武帝に寵愛された美女であり、美貌は楊貴妃と並び称されるものであったという。ただ、芭蕉の念頭には、李夫人はなかったと思われる。白居易「李夫人」から見る彼女の姿は、若くして病に倒れた悲劇の女性であり、松島を思わせる「陽」の美は読み取れないからだ。ここでは、当時、一般的に楊貴妃や李夫人が美人の代名詞だと認識されていたことを確認し、次の考察へと移りたい。

「長恨歌」と『楊貴妃』では、玄宗の愛を失った楊貴妃の悲しみが描かれており、儂く美しい女性像が読み取られる。既に述べたように、松本寧至氏は、楊貴妃を明るく闊達な美女だと捉えているが、一連の作品の描写を見るに、楊貴妃が「陽」の印象で享受されていたとするのは、考えにくいのである。李夫人のように、悲劇の女性とまでは言えないが、明朗としたイメージはあまり感じ取れない。松島を「陽」としたときに、楊貴妃は当てはまらないだろう。言い換えるならば、芭蕉の指す「美人」は、楊貴妃ではないのである。それでは、「陽」の美女とは誰か。結論から言えば、この「美人」も西施を指していると推測される。

先に、西施は「憂える美女」であると論じた。松島は太平洋に面した「陽」の美を持っており、「陰」の美の象徴である西施は、一見正反対のように考えられる。しかしながら、芭蕉は松島と象潟の両方を西施に例え、女性の持つ相反した美しさを表現したのではないのだろうか。「松島は笑ふが如く、象潟がうらむがごとし」（「象潟」のうち「笑ふ」は開放的で明るいイメージ、「うらむ」は憂えるとし、一人の女性が見せる陽と陰の表情を、それぞれの土地の印象に当てはめたと思われるのである。

一方で、尾形仇氏が指摘しているように、「松島」と「象潟」は多くの点で照応している。例えば、「松島」前半部は漢文調で風景を描写し、後半部では「無依の道者の跡」の記述に筆を割いているのに対し、「象潟」前半部も漢文調で語られ、後半部は「風情の人の実をうかが」っている点、「松島」が「東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたふ」と俯瞰的視点で描写されているのと同様に、「象潟」も「坂田の湊より東北の方、山を越、磯を伝ひ、い

さごを踏みて」と鳥瞰しているような様子を描いた点などである（『おくのほそ道評釈』）。これらの照応は、芭蕉の明確な意図によるものと考えてよいだろう。芭蕉にとつての松島と象潟とは、古歌に詠まれた憧れの地であり、双肩する美しさを持つ土地であった。芭蕉は松島と象潟を同じ女性に例え、二つの土地の類似性に見える相違性、つまりは西施の見せる陰陽の感情を表現しようと試みたのである。「美人」と言えば、楊貴妃や李夫人を指すというのが、当時の一般的な感性であったが、芭蕉はそうした枠組みにとらわれず、自由な感覚で「美人」を表現した。芭蕉にとつての「美人」とは、蘇東坡「西湖」から想像する西施なのだ。正反対の性質を持つ土地を、あえて同じ女性に例える点に、芭蕉の鋭敏な言語感覚が伺える。

おわりに

本論文では、『おくのほそ道』における「美人」の用法を詳しく検討した。そしてその経過において、芭蕉の西施像は、「憂える美女」、「薄粧」であるとした。雨にけぶる象潟に、病で憂える西施の姿を重ねたのである。さらに、楊貴妃の受容を論じながら、「美人」とは西施を指すものと解釈した。西施を、正反対の性質を持つ松島と象潟といった土地に例えることで、「美人」という言葉に奥行きを持たせることができたのである。なお、本論での奥行きとは、女性の見せる二面的表情を指す。「松島」で見られるような「陽」の表情、「象潟」で見られるような「陰」の表情、そのどちらも芭蕉にとつては甲乙つけられない美しさであっただろう。芭蕉は「松島」と「象潟」でそれぞれ内容を帰結させながらも、照応性を持たせ、芭蕉ならではの文学空間を築いたのだ。

さて、本論の結論は、芭蕉による「美人」用法は、二つの要素から成り立っているとする。一つには、蘇東坡「西湖」の西施像、もう一つには、二つの土地を同じ女性に例える言語感覚である。そして、芭蕉は「西湖」に影響を受けながらも、古人の作品観に終始しておらず、芭蕉独自の世界観を構築したことにも留意したい。中国古来の美女を眼前の風景に例えるという、時間感覚や既存の枠組にとられない芭蕉の自由な感性と、鋭い言語感覚とが、「美人」用法という独自の文章表現を確立させたのである。

注(1) 本稿では、次のように本文を扱うことを断っておく。

一、『おくのほそ道』引用本文は西村本を底本とし、読みやすいように句読点やかきかっこを補った。

二、漢字は旧字から新字に、平仮名は現行字体に改めた。

三、地名の表記であるが、章段そのものを指す場合には「松島」とかきかっこをつけ、単に地名を指すときには松島と表すこととする。

四、章段の分け方については、尾形仿氏の『おくのほそ道評釈』（角川書店、二〇〇一年）に従う。

(2) 松本寧至氏「松島は笑ふが如く―『奥の細道』の一考察―」（『二松學舎大学院紀要』 十四号 二〇〇〇年三月）

(3) 長沢規矩也氏『和刻本漢籍分類目録』（汲古書院 二〇〇八年 増補補正版）

(4) 住吉朋彦氏「旧刊『聯珠詩格』版本考」（二〇〇八年、『斯道文庫論集』四三号）

(5) 『訳注聯珠詩格』（岩波文庫 二〇〇八年）

(6) それぞれ、『文正草子』・『さいき』は『日本古典文学全集 三十六』（小学館 一九七四年）、『浄瑠璃十二段草紙』は『御伽草子集』（新潮社

一九八〇年、『露殿物語』は『日本古典文学全集 三十七』（小学館 一九七一年）より引用。